

〈実践報告〉

看護学生と外国人留学生在が共につくる演習授業実践報告 —協働学習を目指して—

石井恵美子 ・ 柚山香世子 ・ 宮澤 純子

【要旨】

看護学部では、看護の統合と実践の科目である2年生選択授業「グローバルヘルスb」、4年生選択授業「国際看護」の一部で、外国人留学生（以下、留学生）が参加する演習授業を試みた。この授業において看護学部生（以下、看護学生）と留学生が記載した学びから、演習は看護学生、留学生双方にとって有益なものであることが明らかになった。看護学部の2年生は共通の話題を介した交流から、グローバルな視点や態度を養い、4年生は場面設定をしたコミュニケーション演習から、外国人の様々な背景を個別性の一つとして捉え、これまでの看護の学びの中に統合することができていた。留学生は、看護学生と交流すること、模擬患者の役割を担うことを通して、充実感・満足感を得て、日本語の学習への意欲を高めていた。

今後はこの協働学習の質の向上を目指し、授業の方法を検討していきたい。

キーワード：看護学生、留学生、協働学習、グローバル人材、国際看護学

I. はじめに

グローバル社会の進展に伴い、保健医療職者には、国内外で外国人に関わり、対応する能力が求められている。外務省（2022）によると、海外在留邦人数は2021年10月現在1,344,900人で、その中には海外で就労や留学をする看護職者もいる。また法務省入国管理局（2022）によると、日本の在留外国人は2021年末で2,760,635人となり、2020年に始まったCOVID-19感染症流行後、減少がみられるものの、今後は再び在留外国人は増加することが予想される。

大学における看護系人材養成のあり方に関する検討会では、「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」の中で、学士課程においてコアとなる看護実践能力に「国際社会・多様な文化における看護職の役割」があげられ、その学修目標には、「①国際社会における保健・医療・福祉の現状と課題について理解できる、②多様な文化背景を持つ人々の生活の支援に必要な能力を理解できる、③国際社会における健康課題と戦略を理解し、今後の看護職に求められる役割や責任について考察できる」とあり（文部科学省、2017）、看護系大学では「国際看護学」に関する科目を導入している。

本学では2012年の看護学部開設以来、グローバルな視点を持ち、多様性を理解した上で健康や看護の役割を考えることのできる看護職者の育成を目指しており、1年生必修のアメリカ研修に始まり、任意の参加で1、2年生のインド研修、2年生の韓国研修、中国研修、4年生のハンガリー研修、オーストラリア研修等を行ってきた。しかし2020年からのCOVID-19感染拡大により、海外渡航が困難となり、オンライン研修等への変更が余儀なくされた。そのような中、何とか看護学部生（以下、看護学生）にリアルな体験を味わってもらおうと、2年生選択科目「グローバルヘルスb」（2021年度～）、4年生選択科目「国際看護」（2022年度）で、本学の外国人留学生（以下、留学生）に授業参加を依頼し、共につくる演習授業を計画した。

ここでは、本学看護学生と留学生が活動した演習授業について看護学生や留学生が記載した学びから、看護学生・留学生双方にとって有意義な学修のための示唆を得ることとした。

Ⅱ．授業の内容と方法

1. 2年生選択授業「グローバルヘルスb」

通年の全7回（105分／回）の科目である。2021年度の授業内容（表1）は、原則として韓国や中国での海外研修（現地・オンライン）への参加により単位を認定している科目である。履修者数は、2021年度は13名、2022年度は10名であった。全授業の5回目以降の回に実施する留学生との交流は、海外研修の準備として、「交流を通じて、文化の違いや健康等の習慣の違いを知り、相互理解を深める。また、必要な言語習得の機会とすること」を目的とし、「健康」「文化」というテーマをもち交流している。

留学生の募集は、本学国際教育センター・留学生センターを通し、留学生に交流の目的、募集人数（10～15人程度）、日程を伝え、参加者を募った。

2021年度はオンライン形式での交流とし、Web会議システムCisco Webex Meetings（以下、Webex）のブレイクアウトセッション機能を使用して、同じグループとの交流を3回実施した。

2022年度は、対面での交流が可能となり、留学生と看護学生の都合の良い時間に大学内で4回交流した。事前に交流の目的やメンバー紹介、グループ作成、交流の組み合わせを確認し、グループは、グローバルヘルスb履修者の看護学生と韓国人と中国人の留学生グループを組み合わせで編成した。

交流後の課題としてクラウド型教育支援システムmanaba（以下、manaba）を使用し、交流後に各履修者から学びの報告を得た。

表1 グローバルヘルスb (2年生) 授業内容 (2021~2022年度)

回	内 容
第1回	オリエンテーションと自己紹介 (日本語、できる方は中国語・韓国語)
第2回	日中韓の歴史 (講義)
第3回・第4回	わが国と研修国について (調べ学習) ○保健・医療制度、看護教育制度 ○交流先の情報収集 ○社会情勢
第5回~第7回	研修国の言語や文化、健康習慣等について (留学生との交流から) ○挨拶や物の数え方、役に立つ言葉、若者の興味、流行 (話題作りに) など ○研修先の文化、身近な健康に関する習慣についてなど
授業時間外	研修に向けての準備 (研修に合わせて、日程や内容を調整する) ○大学・学部紹介の準備 ○韓国の看護学生への質問の準備 ○研修のしおり作成など

2. 4年生選択授業「国際看護」

春学期の全7回 (105分/回) の科目である。履修者数は28名、担当教員2名だった。留学生は、第6回の授業「やさしい日本語—外国人と日本語でコミュニケーションをとるために—」に参加した。

表2 国際看護 (4年生) 授業内容 (2022年度)

回	内 容
第1回	グローバルヘルスの視点
第2回	国際協力の諸機関とその役割
第3回	国際看護と Sustainable Development Goals (SDGs)
第4回	内なる国際化と看護 ①外国人への看護
第5回	内なる国際化と看護 ②外国人との看護
第6回	やさしい日本語—外国人と日本語でコミュニケーションをとるために—
第7回	国際看護の実践

演習では、既習の「やさしい日本語」を使用した。「やさしい日本語」とは、外国人でもわかるように、わかりやすく話す (書く) 日本語のこと。日本語を母語としない方、高齢者、障がいのある方など、さまざまな方に用いられている (武田ら, 2021)。病院の整形外科外来の設定で看護学生が看護師役、留学生が患者役となり病状、療養中の注意、服薬の仕方などの説明をグループに分かれて行った。事例・状況、シナリオについては、医療×「やさしい日本語」研究会 (<http://easy-japanese.info>) がウェブ上で公開している「ワークショップセミナー教材」の「ロールプレイ用シナリオ」を使用した。

留学生の募集は、A4サイズのチラシをやさしい日本語・中国語・英語で作成し (図1)、留学生が毎日出席登録で訪れる国際教育センターのカウンターに約10日間置かせてもらった。参加希望者には国際教育センターの職員を通して申込表に名前と連絡先の記入を依頼した。

当日のプログラムでは、ロールプレイの前後に学生同士で交流する時間を設けた（図2）。授業は教職員の自由参加を認め、外国人教員1名も参加した。



図1 留学生への参加案内



図2 当日のプログラム

3. 倫理的配慮について

両授業の終了・成績評価後に、対象学生に対して文書（オンライン）にて感想と学びの報告の利用とその目的、個人が特定されないようにデータを取り扱うことを説明し、データの希望しない学生は申し出るよう依頼した。申し出はなかった。

Ⅲ. 授業を通しての学び

1. 2年生選択授業「グローバルヘルスb」

1) 授業の参加者

2021年度は、オンラインでの交流を3回実施し、参加者は、看護学生13名、留学生9名であった。2022年度は、対面での交流を4回実施し、参加者は、看護学生10名、留学生11名であった（表3）。

表3 留学生交流会参加者

年度	グローバルヘルスb 履修者（看護学生）	外国人留学生		合計
		韓国	中国	
2021年	13名	6名	3名	22名
2022年	10名	4名	7名	21名

2) 留学生の参加状況と感想

留学生は、各回の交流に毎回参加した人、部分的に参加した人がいた。友人を連れて参加した人もいた。2022年度に参加した留学生には、交流後にMicrosoft Formsを使用したアンケートの記載をメールで依頼した。2週間程度の回答期間を設定し、11人中2名の回答（18.2%）があった。

留学生のアンケートの回答には、「身近なトピックについて、色々なことを話し合えてよかったと思う（3回交流）」「日本の学生はみな積極的だ。私も多くの知識を学んで、自分の日本語のレベルを高めた。次回も交流会に参加したいと思う（4回交流）」と感想が述べられていた。

3) 留学生との交流を通した看護学生の学び

交流を通して得た看護学生の学びを、内容の類似性でまとめて分類した結果を表4に示した。学生の学びは、〈日本人学生と留学生との交流に対する思いの違いを知る〉〈留学生との交流に緊張や不安を感じる〉〈言葉よりも交流してみることの大切さを学ぶ〉〈積極性が必要だと学ぶ〉〈互いの国の類似点や相違点に気づく〉〈異なる文化や価値観を理解することの大切さを学ぶ〉〈他の国や人への興味が湧き、理解を広げたいと望む〉に分類された。

〈日本人学生と留学生との交流に対する思いの違いを知る〉では、互いに関わりたい思いを持ちながらも日本人学生は「外国語能力が足りないから」や留学生は「外国人の物の見方や考え方を知らず、自分たちに感心がない」と思いがちだと捉えていた。

表4 留学生との交流を通した看護学生の感想と学び

カテゴリー	内容
日本人学生と留学生との交流に対する思いの違いを知る	<ul style="list-style-type: none">・「留学生と友達になれるには、どうしたらいいか」と興味はあったが、近づき方がわからず、交流ができる授業を選択した・日本人学生は「外国語能力が足りないから」と考えがちなのに対して、留学生は「外国人の物の見方や考え方を知らず、自分たちに感心がない」と思いがちであった
留学生との交流に緊張や不安を感じる	<ul style="list-style-type: none">・1回目の交流では緊張して、話が止まってしまうこともあったが色々な質問ができた・交流が、留学生に負担になるかと不安に思った
交流してみることの大切さを学ぶ	<ul style="list-style-type: none">・言葉の違いよりも、つきあおうとする態度、意思を伝えようとする工夫のほうが、ずっと重要だと思った・日本語が完璧な留学生としか話さないわけではなく、日本語を少々間違っても、楽しいと思える留学生とつきあいたい・実際に交流してみたら、間違いながらもなんとかするんだと思い定め、話をしてみるのが大切であると感じた・特別なことなどしなくても、普段の生活の中で、普通に交わっていくことが一番であることを学んだ・言葉の呪縛を離れて、態度や行動における本当の意味での国際性を自然に身につけていくための、よい機会であったと感じた

カテゴリー	内 容
積極性が必要だと学ぶ	<ul style="list-style-type: none"> ・中国人留学生から積極的に話しかけてくれてとても助かった ・相手に伝わりやすいような言葉を選び、難しい言葉は翻訳アプリを使うなど、どうしたら相手に伝わりやすいかを考える中で、「国際交流」には積極性が必要だと学ぶことができた
互いの国の類似点や相違点に気づく	<ul style="list-style-type: none"> ・日本で生活していたらあまり意識しなかった日本の医療が充実していることに気づけたので、今後ありがたみを自覚し生活していきたい ・留学生が私の知らなかった日本の歴史を知っていることもあった ・中国は、看護師の地位が低いことや農村部と都市部では、医療費や受診できる病院に差がある等、日本とは違う考えや制度が目立った ・韓国は、日本と類似している点が多くこれといった違いや文化を感じられなかった ・日本と同じだと思ったことや、全く違うことなどいろいろな発見をすることができた ・医療制度や看護師の仕事内容の違いなども感じたが、何より文化が国によって異なると改めて感じた
異なる文化や価値観を理解することの大切さを学ぶ	<ul style="list-style-type: none"> ・今後は外国人と一緒に仕事をする機会も増えると考え、様々な国の医療や文化の特徴を知り理解し、協働することが重要と思う ・患者さんが外国人の場合に、文化の違いを理解せずに接して誤解を招く可能性があるため、文化の違いを理解することは大切だと感じる ・様々な文化や流行、価値観に触れ、「国際交流」では、お互いの国の異なる文化や価値観を理解することが大切だと学んだ ・国ごとに国民性や継承されてきた文化、概念などは大きく異なり、それらを踏まえた上でお互いの国のメリット・デメリットを知り、それぞれの国に取り入れていくことが必要と思う ・言語や文化が違っても話して互いを知り、理解することで自分の相手へのイメージ(偏見)はなくなり、より相手のことを知りたくなる ・国で人を決めつけるのではなく、その個人を見るのが大切だと思っていたが、今回それを感じることができた
他の国や人への興味が湧き、理解を広げたいと望む	<ul style="list-style-type: none"> ・優しくしてもらい、一緒にお昼を食べながら色々な話をし、これからも交流してもっと仲良くなりたいと思った ・観光地らしい場所ではなく、地元の方が行く場所を教えて貰えて、ぜひ食べに行ってみたいと思った ・益々韓国にも中国にも興味が湧き、将来絶対に行ってみたいと思った ・機会があればもっと他の習慣や文化も聞いてみたいと思え、相手の出身国について興味が湧くのを感じることができた ・今回は、中国と韓国の2か国のみだったので他のヨーロッパやアフリカなどの国についても調べてみたいと興味がわいた ・これからも積極的に沢山の人とコミュニケーションをとり、自分の世界を広げていきたいと思えた活動だった ・今回の交流はとても貴重な体験だと思うので、得た知識を忘れずに今後活かしていきたいと感じた

〈留学生との交流に緊張や不安を感じる〉では、交流前や開始時には、「留学生に負担になるかと不安」に思い緊張を感じていた。〈交流してみることの大切さを学ぶ〉では、「言葉の違いよりも、つきあおうとする態度、意思を伝えようとする工夫のほうが、ずっと重要だ」と気づき、話してみることの大切さを学んでいた。〈積極性が必要だと学ぶ〉では、留学生から「積極的に話しかけてくれてとても助かった」体験や「相手に伝わりやすいような言葉を選ぶ」「翻訳アプリを使う」などして、関心を持ち積極的に相手へ関わる姿勢の必要性を学んでいた。〈互いの国の類似点や相違点に気づく〉では、日本について「知らなかった歴史」や日本の医療が整っていると「ありがたみを自覚」し、他の国と日本との違いや似通う点について気づきを得ていた。〈異なる文化や価値観を理解することの大切さを学ぶ〉では、将来「外国人と一緒に仕事をする機会が増える」ことや「患者さんが外国人の場合に、文化の違いを理解せずに接して、誤解を招く」懸念を抱いていた。また、「言語や文化が違って話して互いを知り、理解することで自分の相手へのイメージ（偏見）はなくなる」と捉えていた。〈他の国や人への興味が湧き、理解を広げたいと望む〉では、「交流してもっと仲良くなりたい」思いや「相手の出身国に興味が増える」のを感じ、他者を理解し「自分の世界を広げていきたい」との思いを抱いていた。

2. 4年生選択授業「国際看護」

1) 参加者

看護学生28名、留学生3名と外国人教員1名だった。

2) 留学生、外国人教員の感想

留学生からは、「看護学部の学生と話すことは今までなかったので、うれしかった」、「このような機会を作ってくれて、ありがたかった」、「自分が初めて留学した時のことを思い出した」、「日本の病院に入院した時のことを思い出した」との感想が述べられていた。

参加者たちは、看護学生と授業時間（105分）をフルに使ってロールプレイとフリートーク、演習室への案内を行っていた。

3) 看護学生の感想・学び

学生はリアルタイムのアンケート（respon）に、できたこと、できなかったことを記載し、その場で共有した（表5）。演習でできたことよりも、できなかったことの回答が多くみられた。事前に「やさしい日本語」について講義し、練習問題などもして臨んだが、「思っていたよりも伝わらなかった」を挙げた学生は5名（18.0%）いた。難しい用語は、分かりやすく言い換えたり、ジェスチャーやイラストを用いて理解を促せたケースもあったが、いろいろ試してもうまく通じなかったり、難しい場合もあった。また「坐薬」のように対象者の国の医療事情では一般的ではない場合は、説明しても理解を得ることが難しかった。

表5 「国際看護」の演習でできたこと、できなかったこと

できたこと、工夫したところ	できなかったこと、難しかったところ
<ul style="list-style-type: none"> ・難しい単語は分かりやすく言い換える ・長い文は短く切って伝える ・相手が理解できてるか確認しながら話す ・イラストを描いたり、ものを見せながら説明する ・はっきり、ゆっくり話す ・ボディランゲージ、ジェスチャーを使う ・中国の人には、漢字を書いて伝える ・患者さんに理解したことを言ってもらう 	<ul style="list-style-type: none"> ・思っていたより伝わらなかった ・じぶんでは「やさしい日本語」を使っているつもりだったが、伝わっていなかった ・「捻挫」「骨折」などの専門用語や「できるだけ」など曖昧な表現は伝わりにくかった ・包帯を「ぐるぐる」と説明したら、もっと分かりにくくなってしまった ・「坐薬」は相手の国では一般的ではなかったようで、説明してもよく理解できていなかった

表6 「国際看護」の授業を通しての感想、学び

カテゴリー	内 容
対象者に合った対応	<ul style="list-style-type: none"> ・外国人というひとづくりではなく、その人らしい対応が必要と思った ・外国の方でも理解力が変わってくるので、相手の情報をまず収集することが必要 ・文化や言語などその人にあったコミュニケーションを意識することが必要 ・こまめに言動・反応をみて、本当に通じているのか、理解できているのか、自分の物差しだけの「やさしい日本語」になっていないか、などを確認する必要があると感じた
相手のことを思いやる	<ul style="list-style-type: none"> ・外国人は異国で病院に行くことにとっても不安に感じると思った ・相手のことを考えていろいろ試しながら、お互いが気持ちよくコミュニケーションをとれる方法として、相手を思いやる優しい心が大切と感じた ・単に情報伝達にならないように相手を思いやる気持ちを持って接することが大切であると感じた
非言語メッセージの大切さ	<ul style="list-style-type: none"> ・絵や図、ジェスチャーなども大切 ・写真やパンフレットを見せながら行うことでより分かりやすくなる ・話を聴くということは、それだけでも安心を与えることができ、治療につながる。眼と眼を合わせ、顔色を窺いながら、その話が通じているか、どこまで通じているか等を汲み取ることも大切なことだと感じた
環境づくり	<ul style="list-style-type: none"> ・海外の方の名前は日本人からすると難しいことがあるので、何と呼べばよいかを大切にすることを学んだ ・話しやすい環境、質問しやすい環境を作って症状の説明を行いたいと感じた
楽しい経験、よい経験	<ul style="list-style-type: none"> ・授業で聴いている分には、「やさしい日本語」というくらいだから日本人からしたら簡単だろうと考えていたが、普段使わない単語を選ぶことはとても難しいと感じたけれどとても楽しかった ・良い経験となった ・ふだん留学生とかかわる機会がないから、交流することができてうれしかった。留学生も日本の友達ができないと悩んでいた。いろいろな話ができて楽しかった ・こういう機会がもっと増えたらお互いにとってよいのかもしれない ・楽しみながら「やさしい日本語」について学ぶことができよかった

授業を通しての学びを内容別に分類した結果を表6に示した。〈対象にあった対応〉〈相手を思いやる〉〈非言語メッセージの大切さ〉〈環境づくり〉〈楽しい経験、よい経験〉に分類された。

〈対象にあった対応〉では、「外国人というひとくくりではなく、その人らしい対応が必要」など、外国人という側面だけではなく、対象者をいろいろな側面を持った個人と認識して、相手の能力や特性に合わせた対応の必要性が述べられている。〈相手のことを思いやる〉では、「相手を思いやる気持ちを持って接することが大切」など、相手の立場で考える、想像することの大切さを学んでいた。〈非言語メッセージの大切さ〉では、「絵や図、ジェスチャーなども大切」とあるように、言語だけでなく、非言語手段を使用することの効果を実感していた。また「話を聴くということは、それだけでも安心を与えることができる」「目と目を合わせ、顔色を窺いながら、その話が通じているか、どこまで通じているか等をくみ取ることも大切なこと」など、相手の話に耳を傾けること、観察することの大切さを感じていた。〈環境づくり〉では、「何と呼べばよいかを大切にする」など、呼称の大切さ、相手が話しやすい、質問しやすい環境について考察していた。〈楽しい経験、よい経験〉では、「ふだん留学生とかがかわる機会がないから、交流することができてうれしかった」「良い経験となった」など留学生との交流ができたことが楽しかった、よかった、うれしかったという経験が述べられていた。

IV. 考 察

1. グローバルな視点をはぐくむ授業

2年生「グローバルヘルスb」で学生が記載した学びでは、当初は留学生との交流に緊張や不安を感じている看護学生もいたが、交流をするにつれて、態度や伝えようとする工夫が重要だと気づき、まずは話してみるものの大切さに気付いていた。また相手に関心を持ち積極的に関わることの必要性を学んでいた。さらに、看護学生が「健康」についての話題を留学生と共有する中で、看護の対象となる外国人患者を想像し、異なる文化や価値観をもつ人を誤解せぬよう理解することの大切さを学んでいた。このような理解を通して、交流した留学生の出身国以外の国や人に対しても興味が湧き、もっといろいろな国の人たちと接したいと思うようになった。留学生と実際にかかわることによって、講義形式や机上の学習では得られない体験となった。

高橋（2005）は、日本人学生と留学生とが共に学ぶことによって、交流が生まれ、相互の理解が進み、異文化を「感情」「認識」「スキル」の3つの側面から理解しようとする態度を育てることができたと報告している。本授業を受講した看護学生もいろいろな側面から相手をとらえ、相手を理解しようとする態度をはぐくんでいた。

4年生「国際看護」では、看護学生は留学生との演習で、はじめは相手を「外国人模擬患者」と一括りにしてとらえていたが、接していくうちに、それぞれ国や背景、滞在年数、日本語理解力などに違いがあり、相手に合ったさまざまな方法で対応する必要があることに気づいた。

これは、3年生の臨地実習で、看護の対象の特性に合わせた個別性のある看護を実践してきた経験があったことによって、言葉が通じないことや異文化の背景を持つことを相手の特徴の一つとして捉えるができたのではないかと考える。すなわち、この演習を通してグローバルな視点を看護活動の中に統合していた。

2. 協働学習をめざして

今回、授業に参加した留学生の感想からは、「身近なトピックについて、いろいろなことを話し合えてよかったと思う」「日本の学生はみな積極的だ。私も多くの知識を学んで、自分の日本語レベルを高めたい。次回も交流会に参加したいと思う」「看護学部の学生と話すことは今までなかったので、うれしかった」など、肯定的な声が寄せられており、日本語学習への意欲向上のきっかけにもなっていた。

阿部ら（2007）は、模擬患者の満足感と負担感に関する研究で、模擬患者の9割以上が、「いつも」「時々」充実感・満足感があると回答し、充実感の要因として「学習者の成長」「スタッフや学習者との交流」等があったと報告している。今回の授業においても、留学生が看護学生と交流すること、模擬患者の役割を担うことを通して留学生の充実感、満足感が得られたといえる。

今後更に多くの留学生に参加してもらえるように、留学生を担当する教職員と連携し、看護学生と留学生の協働学習の継続的発展を目指したい。

V. まとめ

今回の演習授業は看護学生、留学生双方にとって有益なものであることが授業の学びから明らかになった。2年生は共通の話題を介した交流から、グローバルな視点や態度を養い、4年生は場面設定をしたコミュニケーション演習から、外国人の様々な背景を個別性の一つとして捉え、これまでの看護の学びの中に統合することができていた。またこのことから今後は、双方の授業の一環として協働して学習することを目指す。

今後はこの協働学習の質の向上を目指し、授業の方法を検討していきたい。

【謝辞】

外国人留学生募集にあたりご尽力くださった、バハウ・サイモン・ピーター先生はじめ、国際部スタッフの皆様、「グローバルヘルスb」の授業を組み立てるにあたってご協力いただいた韓南大学金湖植先生、授業にご協力くださった留学生の皆さんに感謝申し上げます。

【引用文献】

- 阿部恵子, 鈴木富雄, 藤崎和彦, 伴信太郎. (2007). 模擬患者 (SP) の現状及び満足感と負担感: 全国意識調査第一報. 医学教育, 38(5), 301-307.
- 外務省. (2022). 海外在留邦人数調査統計 (令和4年版)
<http://view.officeapps.live.com/op/view.aspx?src=https%3A%2F%2Fwww.mofa.go.jp%2Fmofaj%2Ffiles%2F100293778.xlsx&wdOrigin=BROWSELINK> (2022年10月22日閲覧)
- 法務省, 入国管理局. (2022). 令和3年末現在における在留外国人数について.
<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00250012&tstat=&cycle=1&year=20210&month=24101212&tclass1=000001060399> (2022年8月16日閲覧)
- 医療×「やさしい日本語」研究会. (2022). ロールプレイ用シナリオ. <https://easy-japanese.info>
(2022年10月22日閲覧)
- 文部科学省. (2017). 看護学教育モデル・コア・カリキュラム～「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の習得を目指した学修目標～.
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1397885_1.pdf (2022年10月28日閲覧)
- 高橋亜紀子. (2005). 日本人学生と留学生とが共に学ぶ意義: 『異文化間教育論』受講者のコメント分析から. 宮城教育大学紀要, 40, 15-25.
- 武田裕子, 岩田一成, 新居みどり. (2021). 医療現場の外国人対応 英語だけじゃない「やさしい日本語」(p.12). 南山堂.

Collaborative Learning Approach with Undergraduate Nursing Students and International Students: A Practical Report

Emiko Ishii, Kayoko Yuyama, Junko Miyazawa

Abstract

The Faculty of Nursing has attempted to conduct an exercise class in which international students participate as part of the second-year elective class “Global Health b” and the fourth-year elective class “Global Nursing,” which are subjects of nursing integration and practice. From the learning described by undergraduate nursing students and international students in these classes, it became clear that the exercises were beneficial to both nursing students and international students. The second-year nursing students were able to develop a global perspective and attitude through interaction over common topics, while the fourth-year students were able to view the various backgrounds of the international students as one of their individual characteristics and integrate them into their previous nursing studies through the communication exercise with a scene setting. The international students gained a sense of fulfillment and satisfaction through interacting with the nursing students and taking on the role of a simulated patient. Moreover, they were more motivated to learn Japanese.

In the future, we would like to examine teaching methods to improve the quality of this collaborative learning approach.

Keywords: nursing students, international students, collaborative learning, global human resources, global nursing